

「アートフェア東京19」で編集部が選んだベストブース

3月9日まで開催されている「アートフェア東京 19」。編集部4人がそれぞれ注目したブースとアーティストを紹介する。

2025.3.6

王崇橋（編集部）セレクト

[ペロタン](#)東京のブースでは、ドレスデンを拠点に活動するアーティスト、ラオ・フー（傅饒）の個展が開催されている。フーの絵画は、東洋と西洋の文化の狭間にあり、その「in-between」の感覚が視覚的な物語として立ち現れる。彼の作品に描かれる情景は、現実と幻想の境界を曖昧にしながら、古典的な構図と現代的な色彩の対比によって観る者を引きつける。



ペロタン東京のブースより

また、フーの作品の特徴として、絵画材料に対する実験的な探求が挙げられる。彼は、中国の毛筆に油絵の具をつけて描くという手法を用い、大画面の作品では中国山水画の遠近法を取り入れている。この伝統的な筆致と、エドヴァルド・ムンク、ピーター・ドイグ、ダニエル・リヒターから影響を受けた西洋絵画の要素が交錯することで、作品には純粋な色彩の力が宿る。



ペロタン東京のブースより

さらに、今回の出展作品はすべて、日本での展示を念頭に制作されたという。名状しがたい不安や畏れの感覚は、日本美学の「幽玄」や「間」の概念と共鳴し、作品に登場する謎めいた人物たちは、18世紀から19世紀のヨーロッパの神話や幻想文学に由来しながらも、同時に東洋的な静謐さを内包している。